芝蘭会報
第177号
発行所
一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会
〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail:info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主な内容

②京大病院臨床懇話会
京大病院iPS細胞・再生医学研究会
臨床研究ワークショップ
③「平成二十四年の想い」（小川純）
④校友会・KMS・FUNDだより
⑤支部だより　島根／近畿北／和歌山
⑥支部だより　香川／神戸
支部だより　北海道
人事異動・会員訃報

旧解剖講堂 復元へ着工

記念講堂・歴史資料館に
寄附、理解と協力を

医学部長・医学研究科長　湊 長博

昨年の医学部教授会で、長い間使われないまま放置されてきた由緒ある旧解剖講堂をなんとか元の姿に復元し、これまで本医学部になかった歴史資料館を併設した記念講堂として蘇らせることが合意されました。

これにかかる復元資金約1億円のうち不足分約5000万円を、芝蘭会の皆さまのご援助でお願いしたいと芝蘭会理事会・総会にお諮りしたところ快くご承認をいただき、昨年10月からご寄附のお願いをしてきたところです。幸い本趣旨は多くの会員の皆さまの多大なご賛同を得ることができ、本年1月末までの4ヵ月間ですでに目標額の約半分のご寄附をいただくことができました。心からお礼申し上げます。

これを受けて、当初設計に基づき本年2月より復元工事に着工し、すでに屋根の葺き替え工事が始まっています。

旧解剖講堂には大きなシャンデリアが3基あり、さすがにこれは古くて危なく、かといって新規購入もままならず困っていたところ、事務の用度係が京大中を探し回って京大人文研からまだ使える立派なシャンデリアを3基調達してきてくれました。

併行して歴史資料館の展示準備も進んでいます。ちょうど今年度の補正予算で解剖センターの耐震工事が認められたのを機に、同センターに長年埋もれていた多くの歴史的資料についても予算をつけて整理するつもりでおります。

屋根の葺き替え工事が始まった旧解剖講堂

昨年末には、故足立文太郎名誉教授と長谷部言人博士がドイツ語で書かれ図書館に保存されている「Das Arteriensystem der Japaner」全2巻（1928年発行）について、米国バーミンガム大学から極めて貴重な書籍なので英訳の版権許可をいただきたいという依頼がありました。完成した暁には、原書とその英訳本をともに歴史資料館に展示し、多くの皆さまに公開させていただきたいと考えています。

このように復元作業は順調に進みつつありますが、寄附総額は予想より早いとはいえ現在まだ目標額の半分です。改めまして、芝蘭会の皆さまには本趣旨にご理解とご賛同をいただき、なにとぞもう一踏ん張りのご協力をいただきたく心からお願い申し上げる次第です。

今秋までには竣工し、生まれ変わった記念講堂が学生の講義や芝蘭会会員の皆さまの諸行事で生き返るのみならず、広く一般市民に本医学部の歴史をつぶさに知っていただく場となることを心待ちに祈念しております。

平成24年度の受章者

秋の叙勲

瑞宝中綬章

池田　正之（昭32年卒）
京都大学名誉教授

森田　陸司（昭35年卒）
滋賀医科大学名誉教授

粉川　皓仲（昭37年卒）
元国立京都病院長

家森　幸男（昭37年卒）
京都大学名誉教授

現状、課題 熱心に論議
京大臨床研究中核病院構想シンポ
国内外から670人が参加

京都大学医学部附属病院では、平成25年2月9日（土）に国立京都国際会館において「京都大学臨床研究中核病院構想シンポジウム」を開催しました。

開会の挨拶をする三嶋病院長

各大学の関係者によるラウンドディスカッション

臨床研究中核病院構想は、国際水準の質の高い臨床研究や難病などの医師主導治験を推進し、日本発の革新的な医薬品・医療機器を創出するために複数病院からなる大規模なネットワークを構築し、日本の臨床研究を推進する事業として厚生労働省が実施しており、京都大学医学部附属病院のほかには、北海道大学病院、千葉大学医学部附属病院、名古屋大学医学部附属病院、九州大学病院の計5機関が拠点病院として認定されています。

京都大学医学部附属病院臨床研究中核病院構想は、高品質のシーズ創出力（基礎医学）、臨床研究支援（臨床医学）、臨床疫学を中心としたプロトコル策定力（社会医学）を有機的に結集し、優れた臨床研究を実施できる体制を樹立して、治療方法のない難病に苦しむ人々に対し1日も早い先進医療の提供を目指すものであり、本シンポジウムの開催は、京都大学臨床研究中核病院構想をベースとして、本事業を広く市民、患者団体、関連病院、業界などに周知することを主な目的として開催したものです。

基調講演を行う Pierre Lafolie
カロリンスカ医科大学准教授

基調講演を行う Dick de Zeeuw グローニンゲン大学医療センター教授

シンポジウムは、「基調講演」、「臨床研究中核病院の紹介」、「ラウンドディスカッション」を中心とした「メイントラック」と、アーネスト法律事務所の藤本久俊弁護士や患者団体の方をお招きして生命・医療倫理に関する規制や遺伝医療特有の倫理問題などについて議論を行う「医療倫理トラック」、若手医師や薬剤師などの後進育成を目的とした「臨床研究教育トラック」の3構成となっており、三嶋理晃京都大学医学部附属病院長による開会挨拶の後、佐原康之厚生労働省医政局研究開発振興課長から、日本における臨床研究の現状と課題並びにこれらの問題解決を図る「臨床研究中核病院事業」の概要について説明があり、Pierre Lafolie カロリンスカ医科大学臨床薬理学科准教授から「GCPは臨床研究を発展させるか、それとも障壁となるか：欧州の場合」、Dick de Zeeuw グローニンゲン大学医療センター臨床薬理学科主任教授から「腎臓の治療、現在われわれはどこまで来ているのか：スタチン類の役割」と題した基調講演が行われました。

続いて、佐藤典宏・北海道大学病院高度先進医療支援センター長、松尾清一・名古屋大学副総長、中西洋一・九州大学医学部附属病院ARO次世代医療センター長、清水章・京都大学医学部附属病院探索医療センター探索医療開発部教授から、各大学における「臨床研究中核病院事業」の紹介があり、前述の4大学に岡山大学を加えたラウンドディスカッションでは、臨床研究中核病院事業によってどのような医療、健康への貢献を目指し、どのような戦略をとるのか、また、横断的な取り組みをどう行っていくべきかなどについて議論が行われました。

その後、井村裕夫・公益財団法人先端医療振興財団理事長（京都大学元総長）から「臨床研究中核病院への期待～特にトランスレーションの科学の推進をめぐって～」と題した講演が行われ、引き続き、京都大学の取り組みとして、中尾一和・医学研究科教授、萩原正敏・医学研究科教授、上嶋健治・医学研究科EBM研究センター特任教授、川上浩司・医学研究科教授から研究発表があり、最後に各大学の取り組みとして、佐藤典宏・北海道大学教授、石黒直樹・名古屋大学教授、中西洋一・九州大学教授、那保友・岡山大学教授による研究トピックスの発表が行われました。

当日は、国内外から約670名もの参加者が訪れ、日本の臨床研究の未来について熱気に満ちた議論が交わされ、盛況のうちに閉会しました。

京大病院 臨床懇話会

地域医療との連携探る

循環器医療テーマ、講演など

平成25年2月11日、「平成24年度京大病院臨床懇話会」が芝蘭会館で開催され、学内外から117名の参加がありました。同懇話会は、地域医療との連携を推進するため、地域で活躍されている医師の先生方と京大病院診療科長らとの意見交換及び京大病院からの情報提供の場として開催しているものであり、今回で16回目となります。

当日は、三嶋理晃病院長、芝蘭会理事の医聖会八幡中央病院・真鍋克次郎理事長の挨拶のあと、新任の松田秀一教授（整形外科長）、松原和夫教授（薬剤部長）、武藤学教授（入院がん診療部長）から、それぞれ挨拶・講演があり、続いて平家俊男教授（iPS細胞臨床開発部長／小児科長）から「iPS細胞臨床開発部開設後の展開について」として京大病院報告がありました。

その後、「京大病院における循環器医療の現状と展望」という全体テーマにより、坂口循環器科内科医院・坂口佳司院長の座長のもと、尾野亘講師（循環器内科）から「動脈硬化性疾患の現状と今後の治療展望」、齋藤成達助教（循環器内科）から「循環器内科の最新デバイス治療」についてそれぞれ講演があり、続いて、日本バプテスト病院・北堅吉病院長の座長のもと、南方謙二講師（心臓血管外科）から「ワーファリンフリーの心臓手術」について、恒吉裕史助教（心臓血管外科）から「心不全の外科治療―バチスタ手術と補助人工心臓」について、丸井晃准教授（探索医療開発部）から「大動脈ステントグラフトの現況と展望」について、それぞれ講演がありました。講演後には質疑応答が行われ、盛況のうちに終了しました。

また、引き続き開催された懇親会においては、京大病院診療科長と出席いただいた医療機関の先生方との活発な意見交換が行われ、大変有意義なものとなりました。

挨拶する三嶋病院長

出席者代表挨拶する真鍋芝蘭会理事（医聖会八幡中央病院理事長）

現状や利用法学ぶ

京大病院iPS細胞・再生医学研究会

1月25日（金）に、京大病院iPS細胞・再生医学研究会を芝蘭会館にて開催しました。同研究会は、当院におけるiPS細胞、ES細胞及び体性幹細胞等を用いた再生医学研究の向上並びに成果の普及を図り、ひいては医療の発展に貢献することを目的として平成21年11月に発足したものです。第7回目となる今回の研究会では、学内外から110名余りの参加がありました。

研究会では、三嶋理晃病院長の開会挨拶の後、篠澤忠紘先生（武田薬品工業株式会社医薬研究本部薬剤安全性研究所）より「ヒトiPS細胞の薬剤安全性評価への応用―現状と期待される利用法について」、後藤慎平先生（京大病院呼吸器内科）より「ヒトiPS細胞を用いた呼吸器再生研究」について、長船健二先生（京都大学iPS細胞研究所准教授）より「iPS細胞を用いた腎臓再生と新規疾患モデルの作製」について、江藤浩之先生（京都大学iPS細胞研究所教授）より「ES／iPS細胞を用いた多面的心血管再生治療戦略」について一般講演が行われました。

引き続き、小寺秀俊先生（京都大学理事・副学長／工学研究科教授）より「細胞実験用マイクロデバイスに関して」について特別講演が行われました。

特別講演する小寺理事・副学長

臨床試験の立案、熱心に

ワークショップに院生39人

探索医療センター助教　角　栄里子

平成24年12月8日（土）に楽友会館で臨床試験の立案演習というワークショップを実施しました。これは大学院教育コース「臨床研究」における合宿として実施されましたが、参加した大学院生は39人と比較的規模が大きな合宿となりました。

午前中は臨床研究に関する講義を行い、午後から六つの班に分かれて与えられた課題に対して回答を作成します。今年度は、「新規の抗癌剤による癌を対象とした臨床試験を立案しなさい」、または「疼痛緩和薬による疼痛を対象とした臨床試験を立案しなさい」という二つの課題を準備し、参加者にどちらかをあらかじめ選択してもらい、希望に基づいて班分けを行っています。計画の立案の際には、試験の目的や対象患者・評価項目・試験デザインなどに加えて、倫理的要件にどのように配慮したのかについても考慮して作成していただきました。3時間で回答をまとめ、各グループから計画を発表してもらい、講評を行いました。完成度の高い計画や、ちょっと意外な計画もあり、最も熱く議論されたであろう班に対して優秀賞を差し上げました。

京大病院は臨床研究中核病院事業に採択され、臨床研究に精通する医師の育成は目標の一つとなっています。適切な臨床試験計画の立案は、科学的で倫理的な臨床試験を行うための第一歩ですが、計画立案についてセミナーなどで講義を受ける機会はあっても、演習を行う機会は限られています。また、完成した計画書には計画作成までの経緯は書かれていませんので、具体的な例についてどのような方法を選択して研究を行うことになるのかという計画立案までの過程について学ぶことができません。この講義とグループワークでは、具体例を用いてグループで意見を出しあい、この結果について講師より講評を得ることで、より良い臨床試験計画を作成するためのエッセンスを伝えています。

今年度は探索医療センターに加えて医療統計学・EBMセンター・薬剤疫学のスタッフが協力して講師を務めました。臨床研究に関する教育についての京都大学内での連携、および大学院生の臨床研究に関する知識の程度を知ることができるという観点から、参加者だけでなく講師にとっても良い機会となりました。講師の先生方、誠にありがとうございました。

講師を務めたスタッフら

臨床研究中核病院整備事業

国際水準の質の高い臨床研究や難病等の医師主導治験を推進し、日本発の革新的な医薬品・医療機器を創出するために、複数病院からなる大規模なネットワークの中核となり、臨床研究の拠点となる機関が必要との観点から厚生労働省が始めた事業で、平成24年度に京都大学医学部附属病院も選定された。事業費は初年度5億円、補助期間は5年間の予定。

平成二十四年の想い

小川　純（昭和二十八年卒）

今は 平成二十四年なのですね！
昭和二十四年の 四月を
二十五年の 五月を 想い出していた

西大路から 東大路へ
希望にあふれ 日々、
丸太町線の 市電に 乗って通った

一回生の秋；
始業前に 人生哲学を 話して下さった
恩師H先生が 黒板に書かれる
大脳、小脳、延髄 の 神経回路は
精緻で 美しかった

二回生の春；
木造りの 階段教室
英国紳士風 恩師K先生は
にこやかに Bakteriologie を
講じられた
時々、わさびの利いた諧謔を 交えながら

土曜日午后、
春の琵琶湖に カッターを 漕ぎ出した
海で鍛えた 多くの友の
オールは 力強かった

一医学生の つたなき訴えを
教授室に通し お茶を出して下さって
じっくりと 聞き
穏やかに 教えて下さった
恩師G先生

若き弟子の 将来を案じ
心をこめて 考えて下さった
恩師N先生の お姿は
いつも 私の心の中に生きている

過ぎ去りし 六十有余年の 歳月
今 八十路の老医

渾身、
生活指導し 食事指導し 与薬した
多くの人々、心の友よ
御身の事を
私は 決して忘れない
意識ある限り 祈る

※註　H先生　平沢　興　先生
K先生　木村　廉　先生
G先生　後藤　光治　先生
N先生　西占　貢　先生

京都大学医学部校友会・教育研究支援基金（KMS・FUND）だより

事務局
〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学部学生会館内
Tel.075-761-2467
Fax.075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.med.kyoto-u.ac.jp

賞金の充実目指す

若手研究者優秀論文賞

KMS・FUND委員長
高次脳科学高次脳形態学教授
金子　武嗣

2013年度の京都大学医学部教育研究支援基金（KMS・FUND）委員会の委員長に就任いたしました高次脳形態学（旧解剖学第一講座）の金子と申します。昨年度から委員に加えていただいていたのですが、まだまだKMS・FUNDの状況も正確には掴んでおりませんでしたことをまずは白状しておいた方がよいかと思います。

ここで、自分自身の気持ちも新たにするためにKMS・FUNDの趣意書を読み返してみました。この基金は、医学部同窓会の芝蘭会、学生・院生の父母などが参加される校友会の皆さまのご支援のもとに資金を集め、「学生の学習や研修活動などの教育支援、大学院生の研究活動などの研究支援」を主目的に運用されるものと述べられております。したがいまして、医学部教員は当然のことであり、また企業等のご協力もありますが、基本的には芝蘭会・校友会の皆さまのご寄附によって成立しているものであることを再確認いたしました。1年間の短期ではございますが、この趣意に則って委員長を努めさせていただく所存です。

さて、基金に基づく事業としましては、一番大きいのは学生会館の設備の充実です。私の個人的な理解ではありますが、そもそもこの基金は学生会館の新設を大きな目的としてスタートしたかと記憶しておりますので、やはりその内容の充実が大切です。今年度は2・4階のトイレ設置、入室認証ゲートの設置といったところを考えております。

ところで、私自身は昭和55年卒なのですが、自分の学生当時のことを思い出しますと、今の学生会館などのように充実した設備はなく、部活のボックスなどぼろぼろの建物があっただけでした。そればかりでなく、医学部の講義棟・研究棟も旧いまま、薄汚いままで、入学した当時「これが天下の京都大学医学部なのか」と嘆じたことを思い出します。当時は学園紛争・学生闘争のまだまだ盛んな時代で、文部省（当時）も大学にお金を掛けてくれなかったのでしょう。その時と比較してはいけないのかもしれませんが、現今の医学生さんに必要なものは十分に与えられているな、あるいは自分の当時と比べてうらやましいくらいだな、と感じています。そんな感覚もありますので、過剰にならない範囲で学生会館のさらなる充実を目指そうかと思っております。

基金の第2の使用用途は、京都大学医学部若手研究者優秀論文賞（KMYIA）です。これは医学部の主に大学院生・研究生・研修員などが国際誌に発表した論文を対象として表彰する賞（award）です。医学部生でももちろん応募できるのですが、研究ではなく学業を主務とする学生さんの受賞はなかなか難しいようです。

2012年度実績では6名に賞が出されて、表彰状と副賞図書券5万円分が授与されました。委員会での討議では、この賞の認知度と権威はまだまだ低いので、工夫をしていく必要があるとの意見の一致をみています。学生会館の充実はそう遠くない将来に終了しますし、その時点では皆さまのご寄附で成立しますKMS・FUNDの主要な使用用途はKMYIAということになるでしょう。ですので、可能であるならば、もう少し人数を絞ってでも十分な副賞賞金を出せるようにしたいと思います。お金で認知度を増そうという作戦をやや下品に感じられる方がおられるかもしれませんが、ノーベル賞でも受賞の名誉だけではなく、相応の賞金の授与が伴います。というわけで「それなりの賞には、それなりの賞金を」と考えております。

まだまだ、ご紹介しなくてはならないKMS・FUNDの活動もございますが、重要と思われます2点にしぼってご紹介いたしました。芝蘭会・校友会の皆さまには今後ともよろしくご協力・ご支援をお願い申し上げます。

学生会館前に退任記念植樹

元医学部長・医学研究科長　成宮　周 教授
初代KMS・FUND委員長　中尾　一和 教授

元医学部長・医学研究科長 成宮周教授と初代京都大学医学部教育研究支援基金（KMS・FUND）委員長 中尾一和教授はこの3月に京都大学教授を退任されます。両教授には基金創設から今日に至るまで多大なご尽力をいただきました。その基金の最初の重要な支援事業として実施されました学生会館の建設は、両教授なくしては実現できなかった偉業であります。両教授は退任を記念して学生会館前に百日紅と寒桜を植樹＝写真＝されました。

医学教育 変化を後押し

自己主導型の学習と臨床実習の充実化へ

医学教育推進センター長　小西　靖彦

医学は、日々進化しています。医学知識や技術の発展は著しく、蓄積は膨大となりつつあります。このような時代においては、専門医や医学者でさえ、努力なくして先端にいることはできません。医学の進歩に教育がついていけなくなっている〝この時代に〟次代の医師・医学者をどう育てるかが重要になってきています。

私が医師になった30年前の医学部は、まだ牧歌的な時代でした。社会もそうでした。右肩上がりで、卒業してから頑張れば自分のいい道をみつけられると信じられていました。インターネットもなく、本を読んで知識を蓄えたものです。お願いすれば実習で普通に患者を診させてもらえました。医学は経験的になされ、知識は上から与えられるものでした。

卒前から卒後、生涯教育を通じての医学教育が、日本の医療・医学レベルを世界のトップクラスにしたのは間違いありません。ただ、日本経済がそうであるように、医学でも楽観はできなくなっています。今、海外で勉強する学生・医師は、日本人が減少の一途で、中国・韓国などが激増しています。今までになかった国際化の波が、医学と医学教育の領域にも流れ込んできています。

私たちは、〝この時代に〟医学教育について指針を持たなければならないのです。

京都大学に入ってきた学生諸君は、卒業した時には高い能力を身につけていなければなりません。その能力とは何か20世紀後半からここ20～30年の間、諸外国ではこの問いについて応えようとしてきました。アメリカは1980年代から、イギリスは1990年代から、卒業時の能力を問う医学教育のありかたを追求してきたのです。このように聞くと、日本だって医師国家試験があるじゃないか、と思われるかもしれません。しかし、三日間500問もの知識のみを測るペーパーテストで本当に良い医師であることを保証するような国はありません。

京都大学医学部は、卒業生の持つべき能力（Outcomeと呼ばれることが多いです）について根本から考え直す機会を持ちました。昨年末に、医学部の教授全員が集まり、私たちの学生が卒業時に身につけておくべきOutcomeとは何かなどについて、終日考える会議を持ったのです。そこでは、知識だけでなく、技能、独創性、国際性、コミュニケーション能力、倫理性、リーダーシップなどさまざまな能力が検討されました。

世界的には、この考え方を〝アウトカム型基盤教育〟と呼んでいます。目標をお題目としてたておき、なんとなく講義だけをやり（それも聴かない学生が多いのです）、ペーパーテストだけで評価する……、こういった従来の方法は、国際的には全く通用しません。アメリカ・ヨーロッパのみならず、東アジア諸国の大半が、アウトカム型に医学教育を変えています。ちなみに、米国ECFMGは、アウトカム型の教育で卒業生の質を保証した国からのみ、米国での医師受験資格を与えると声明を出しています。

京都大学が、〝この時代に〟、強い意志をもって取り組まなければならない医学教育に関する現実的課題が二点あります。

一つ目は、2～4回生での授業の再構成です。医学の領域が際限なく拡大してきたためもあり、講義だけでぎゅうぎゅう詰めのスケジュールになっています。指数関数的に増大した医学知識のすべてを講義で教える時代は終了せざるを得ません。まして、講義は最も受動的で記憶に残りにくい学習形態だということが一般的にいわれていて、自己主導型の学習に切り替えることが求められています。自己主導型とは、自分で問題点を見つけて解決していく学習手法です。これにあわせて、私たちは、知識そのものを教える以上に、どうやったら必要な知識を得られるか（その方法）を教えることが求められます。学生は〝学び方を学ぶ〟のです。同時に、2～4回生の細分化されたテストの連続から新しい評価法を導く必要があります。この点についても、年末の教授会で深い話し合いがされています。

二つ目は、臨床実習の充実化（質と量）です。これまで、日本の実習（京大では5～6回生で行っています）は、実際の診療を後ろから見学することが中心になっていました。これを参加型に変えようとしています。といっても、学生が手術をするわけでも、点滴治療をするわけでもありません。患者を診断したり治療方針を決めたりするときに、まず学生が意見を述べ、研修医や上級医とともに練り上げていくことを参加型と呼んでいます。京都大学は、実習充実を推進する全国80校のうちの10校に昨年選ばれました。

指導医（卒業生）は、医学については習ってきましたが、医学の教育のしかたについてはほとんど習ったことがありません。人は、自分が学んだ方法で、次代を担う学生を教えがちです。最近、あるスポーツ分野で体罰を含めての教育法が問題になっています。教育法についてきちんと学習したスポーツ指導者は多くないので、この人たちが、自分の受けた我流の方法で教えてしまうことが起こります。これは大変な不幸です。医学教育も同じ文脈にあります。スポーツと同じように、医学教育は学生中心であるべきです。体罰は無論、独善的な教え方も、気合いだけでの指導も過去のものです。こういった教育法は、他の方法を知らなかったか、別の方法に踏み出す勇気がなかったから起こってくるのです。スポーツと同じく、〝この時代の〟医学教育は、科学的で新しい方法を採り入れていく努力が必要なのです。

知識量も、組織も、考え方も、患者関係も、大きく時代が変化してしまっている現代においては、新しい教育の方法を積極的に採り入れていくものだけが生き残っていきます。現在の日本の医学において、教育は構造的な死角ですが、今後は医学教育について学ぶ機会を作っていく必要があります。私は、学生の時期から教育法を学ぶことが重要だと思っています。

京都大学に合格したのは、医師・医学者としての始まりに過ぎません。成長して卒業し、生涯学習の能力を高めてよりよい医師・医学者になっていくことが京都大学の医学生に求められるものです。医学教育推進センターは、医学部教育についての変化を常に後押ししていきます。

支部だより

「内視鏡手術」テーマ、興味深く

盛り上がった島根支部総会の参加者ら

【島根】 平成24年11月24日（土）、サンラポーむらくもにて芝蘭会島根支部総会が開催されました。玉造厚生年金病院整形外科部長の池田登先生司会のもと、物故会員の先生への黙祷を捧げ、当番幹事である玉造厚生年金病院病院長の三河義弘先生による挨拶、支部長である島根県立中央病院病院事業管理者の中川正久先生による経過報告、会計報告といった具合に会は進みました。

次に京都大学医学研究科消化管外科教授の坂井義治先生が「京都大学医学部の現状　内視鏡手術の現状と展望」という演題で講演をされました。京都大学医学部の現状については、まず現在の医学研究科・附属病院の運営体制について説明され、次に先端医療機器開発臨床研究センターやメディカルイノベーションセンター棟、積貞棟、I期病棟、京都大学医学部記念講堂・歴史資料館といった新しく設置された施設、設置予定の施設について説明されました。また、京都大学に若い医師の目を向けさせるために京都大学外科交流センターが設立され、それにより大学院の受験者が大幅に増加したというお話がありました。

内視鏡手術の現状と展望については、まず大腸がんの治療の現状について概説されました。日本における手術成績はリンパの流れを三次元的に把握しているため欧米に比べ15～20％ほど良いというお話には大変驚かされました。

次に腹腔鏡、内視鏡手術のメリットや手術における内視鏡手術の割合の推移についてお話しされ、さらにロボット手術についてお話しされました。ロボット手術は従来の腹腔鏡手術に比べ手先を曲げることができ、手ぶれ防止機能がついており、二次元でなく三次元で捉えることができるため、より精緻で体に優しい手術が可能とのことでした。また、最新のロボットでは実際に手術で使うロボットでシミュレーションをすることができ、実際の手術と同じような感覚でシミュレーションをすることができるとのことでした。学生にとっても、とても興味深く面白い内容の講演でした。講演の後は島根県立中央病院病院長の中山健吾先生が次回の支部総会についてお話しされ、懇親会へと移りました。

懇親会は、松江市立病院病院長の錦織優先生の乾杯の音頭とともに始まりました。会は終始和やかな雰囲気で、先生方はわれわれ学生にも優しく声をかけてくださいました。会が進行すると、一人ずつ自己紹介するということで順番にマイクが回され、われわれ学生も挨拶をさせていただきました。島根医療の現状についてや、今までの自分の医師としての半生についてお話になる方もたくさんいらっしゃり、アカデミックな雰囲気で大変盛り上がりました。そして話も弾む中で宴もたけなわとなり、会は惜しまれながらもお開きとなりました。

最後になりましたがこのような貴重な会に参加させていただき感謝の意をもって、島根支部総会・懇談会の報告を終わらせていただきます。

（文責：3回生 鶴田将史）

腎臓病治癒の可能性、研究知る

【和歌山】 平成25年2月24日(日)午後2時半より、和歌山県和歌山市の日本赤十字社和歌山医療センターにて「芝蘭会和歌山支部総会及び学術講演会」が開催されました。

まず学術講演会では京都大学大学院医学研究科腎臓内科学教授の柳田素子先生をお招きして、支部長百井亨先生の挨拶、座長による簡単な柳田先生の略歴紹介の後、「腎臓内科医はどこまで腎臓病を治せるのか」という演題でご講演いただきました。

講演の内容ですが、腎臓内科医の守備範囲は病院内において非常に幅広く、できることなら院内全体の腎不全患者をカバーできるのが理想なのですが、院内発症腎障害をどう防ぐかに柳田先生は特に注目し、血清クレアチニンがそれぞれの患者で上昇していないかをリストアップするソフトの使用を実施してみたそうです。外来で見逃されやすい危険因子を見つけることなどを目的としたこの試みだそうですが、特にどのような患者が腎障害を発症しやすいかを調べるために外来通院患者を検査したところ、癌治療中にクレアチニンが上昇している患者は腎障害発症の可能性が高いと分かったそうです。

実際日本の透析患者のガン保有率は高いのですが、抗ガン剤などの化学療法は様々なリスク因子を有しているために未だ確立されていないそうです。京都大学では透析患者にも非透析患者と変わらぬ医療を提供することを目指しているので、透析患者がガン治療方法の選択に関して非透析患者と差が生まれているのではないかと調査してみたところ、やはり化学療法に関してはデータが不足しており透析患者が近年の抗ガン剤の発展の恩恵を受けられていない傾向にあったそうです。そこで柳田先生はガン治療の標準化のための基盤研究を行い、何とかガン治療を確立させたいと思っているそうです。

和気あいあいの和歌山支部総会

ところで京大では腎臓病を治る病気にするために慢性腎臓病に共通した病態の解明を通して治療の可能性を探っています。実際最近ではそれまで不可能と思われていた低下した腎機能を回復させる薬も開発されており効果が一時的なのかどうかはわかっていないものの、慢性腎臓病の治癒は実は可能なのかもしれないとのことです。慢性腎臓病に共通した病態の一つに腎性貧血がありますが、これに関しては、なぜ腎臓病とともにEPO産生能が下がるのか、そもそもなぜ腎臓でEPOが産生されるのかなど不明な点が多く、EPO産生細胞の同定こそ完了しているものの貧血のメカニズムは不明だそうです。ただ腎不全でもEPO産生能が残っていることは疫学的にも薬理的にも証明されており、柳田先生のチームではEPO産生細胞が腎不全の際に死ぬのではなくて筋線維芽細胞になるのではと考え研究を進めているそうで、実際この筋線維芽細胞を培養することに成功し貧血を治せるようになったそうです。現在チームはこの線維芽細胞をEPO産生細胞に戻せないかなどを研究しているようで、京大腎臓内科のチームの紹介が最後に行われ、講演は多くの質疑応答の後に締めくくられました。

続いて場所を同施設の食堂に移して総会と懇親会が行われました。総会では写真撮影の後、吉田亨先生の司会のもとで支部長のご挨拶があり、工事終了の旨など日本赤十字社和歌山医療センターの現状が話されました。その後会計報告、柳田先生による京大病院の新任教授紹介や研究位養成の専門コースの紹介など近況報告が行われた後、小西先生による乾杯の挨拶により懇親会が始まりました。

会は終始和やかな雰囲気に包まれており、先生方はわれわれ学生にも優しく声をかけてくださり非常にためになるお話をお聞きすることができました。先生方による自己紹介が和気あいあいとした雰囲気の中で行われ、会は惜しまれながらも解散となりました。

最後にこのような素晴らしい会に私たちをお招きくださった芝蘭会和歌山支部の先生方に感謝の意を申し上げ、和歌山支部学術講演会及び総会の報告を終わらせていただきたいと思います。

（文責：2回生　坂本慧）

「関節リウマチ」の基本、分かりやすく

熱心に講演を聞く近畿北支部総会の参加者

【近畿北】 平成24年12月1日(土)公立豊岡病院組合立豊岡病院講堂にて芝蘭会近畿北支部総会が開催されました。本会は、芝蘭会のみならず一般の方にも開放された会となっていました。

初めに、公立豊岡病院組合立豊岡病院整形外科部長の中山富貴先生座長のもと、京都大学大学院医学研究科リウマチ性疾患制御学講座准教授の伊藤宣先生が「関節リウマチ治療のup to date」という演題で講演をされました。まず関節リウマチの基礎的なことを話してくださり、学生のわれわれにも関節リウマチがどういったものか大変分かりやすく伝えてくださいました。関節リウマチは主に手足の関節で炎症性サイトカインと抗炎症性サイトカインのバランスが崩れることによって発症して、慢性・進行性・全身性の炎症性疾患です。炎症の進行は治まっていくことが多いのですが、機能障害と関節破壊はひどくなる一方で特に関節破壊は回復することがなく、関節破壊を食い止めることが大事だそうです。そのためには従来の診断基準では早期発見が難しくなることもあったため、２０１０年に一部改定されました。治療の戦略としては活動性リウマチを寛容の状態に持っていき維持すること、もしくは寛容が難しいときは代替的治療として低疾患活動性に持っていき、維持することを目指します。治療の４本柱は薬物・手術・ケア・リハビリがあり、特に薬物と手術の折り合いが大事になります。薬剤は生物学的製剤が注目されていて、疾患活動性を抑える効果はＭＤＡＲＤＳと大差はないのですが関節破壊に対して大きな効果が見られます。手術は薬剤による活動性のコントロールが進歩したことで減少したものと、よりよいＱＯＬを目指して増加したものがあり、小関節の手術がメーンになってきています。

次に、公立豊岡病院組合立豊岡病院診断部兼胸部外科部長の那須通寛先生座長のもと、京都大学大学院医学研究科器官外科学講座心臓血管外科学教授の坂田隆造先生が「心臓血管外科の現況―診療・研究・教育―」という演題で講演をされました。

まず診療について実際の手術の様子を見せていただいたりしながら、非常に分かりやすい内容でした。大動脈瘤に対するステントクラフト内挿術（ＥＶＡＲ）、心臓弁膜症に対する僧帽弁形成術、心不全特に僧帽弁閉鎖不全を伴う低左室機能症例に対するバチスタ手術の応用、重症性心不全に対する人工心臓（ＬＶＡＤ）の取り付けなどを説明してくださいました。いずれの診療についてもそれぞれの方法の進展や今後の課題を話してくださいました。研究については心筋梗塞に対するｉＰＳ細胞の心筋シートの移植に注目して、現在マウスやブタをモデルにして実験の最中だそうです。

講演終了後場所を移してとど浜理玖群霊の間にて総会・懇談会が開かれました。

総会では24年度の出来事、これまでの経緯、会計報告がされました。懇談会は、丹後中央病院院長の西島直城先生の挨拶で始まり、初めに新しく近畿北支部に加入された先生方の自己紹介が行われ、英語で自己紹介をされる先生もいらっしゃいました。

乾杯の音頭は公立豊岡病院組合院副管理者の竹内秀雄先生がなさいました。懇談会は丹後中央病院秘書広報課の日下部さんと川口さん進行のもと終始和やかな雰囲気で、先生方はわれわれ学生にもやさしく声をかけてくださり、大先輩方の学生時代のことや、専門を決めたきっかけ、近畿北部の医療の現状など、非常にためになる話を聞かせてくださいました。

会が進行すると、集まった先生方が一人ずつ挨拶をするということで順番にマイクがまわされ、われわれ学生も挨拶をさせていただきました。そして宴もたけなわとなり公立豊岡病院組合立豊岡病院病院長曲渕達雄先生が締めの挨拶をなさって、会は惜しまれながらも解散となりました。

最後になりましたがこのような貴重な会に参加させていただき感謝の意をもって、近畿北支部総会・懇談会の報告を終わらせていただきます。

（文責：3回生 森山太陽）

支部だより

かゆみのメカニズム学ぶ

和やかな雰囲気の香川支部総会参加者ら

【香川】　平成24年12月1日（土）、ＪＲホテルクレメント高松にて芝蘭会香川支部総会が開催されました。まず、高松赤十字病院長の笠木寛治先生の司会のもと、京都大学医学部附属病院皮膚生命科学講座皮膚科学分野教授の宮地良樹先生が「一般医のためのかゆみ講座」という演題で、皮膚科領域で非常に多い症状である「かゆみ」のメカニズムや治療などについてご講演されました。

「かゆみ」には中枢性のものと末梢性のものがあり、中枢性のものにはオピオイドなどが関与し、末梢性のものにはヒスタミンなどが関与するとのことでした。「かゆみ」の診断はフローチャートに即して行うのがよく、発疹の有無、内臓疾患・薬剤・食品などの「かゆみ」の原因になるものの有無を順次検討して診断をつけていき、それらに該当しない場合にはドライスキンによる皮膚そう痒症と診断するとのことでした。「かゆみ」の治療法としては、原疾患の除去、ドライスキンの治療、患部の冷却、抗ヒスタミン薬の使用が挙げられていました。現在、抗ヒスタミン薬は眠気を起こしにくい非鎮静性のものの使用が世界的に推奨されています。非鎮静性の抗ヒスタミン薬を投与して効果が充分に得られない場合は、薬剤の変更に加え、非鎮静性という特徴を生かして投与量の増量という選択肢も取ることができるとのことです。ただし、ＩＬ-1βをはじめとした炎症性サイトカインなどが原因となる「かゆみ」もあり、そのような場合は抗ヒスタミン薬が奏効しないということも頭に入れておくべきとのことでした。講演の後の質疑応答の時間には、皮膚科以外の先生からの質問が非常に多く、臨床においてさまざまな科で「かゆみ」の対処が問題となっていることが感じられました。

講演会の後、場所を移して支部総会兼懇親会が開催されました。参加者数は30名近くにのぼり、高松赤十字病院産婦人科部長の野々垣多加史先生の司会のもとで会が進行しました。まず、宮地教授により京都大学の近況報告が行われました。

内容は医学部や附属病院の運営・教育・研究体制、新しく設立された積貞棟や学生会館の概要など多岐にわたりました。近年は積貞棟や学生会館、先端医療機器開発・臨床研究センターなどが続々と竣工し、また先端医療開発特区の研究をはじめとして多くの業績があげられており、ソフト・ハード双方で充実度合いを増してきているとのことでした。さらに、ｉＰＳ細胞研究所長の山中教授がノーベル医学・生理学賞を受賞されたということも明るい話題として提供されました。われわれ学生もこの恵まれた環境の中で少しでも多くのことを身につけていきたいと強く感じました。

懇親会では出席された先生方の近況報告が行われました。診療科の紹介や今後の抱負、趣味のお話などさまざまな話題が挙がり大いに盛り上がりましたが、近年医学部構内の古い建物が次々と新しく建て替えられていることに喜びを感じつつも、同時に寂しさも感じておられる年長の先生方が多くいらっしゃったことが印象に残りました。かつての京都大学にまつわるお話などもうかがうこともでき、普段の大学生活ではあまり感じることのない京都大学の歴史を感じることができました。

懇親会は終始和やかな雰囲気で進み、最後に真弓内科・呼吸器科医院の真弓哲二先生のご挨拶で締めくくり、惜しまれながらもお開きとなりました。

最後になりましたが、素晴らしい会に参加させていただいたことに深く感謝の意を申し上げ、総会のご報告を終わらせていただきます。

（文責：１回生　西川裕太）

「認知症」「ｉＰＳ細胞」講演熱く

【神戸】　平成25年2月11日（月）午後三時半より、神戸市三ノ宮の兵庫県医師会館にて「平成25年度神戸支部学術講演会」が開催されました。

会では吉田耕造支部長が簡単に挨拶をなさった後、京都から京都大学医学部附属病院老年内科診療科長の武地一先生と、京都大学医学部附属病院ｉＰＳ細胞研究所副所長の中畑龍俊先生をお招きして、それぞれ「認知症の疾病観を変える」、「ｉＰＳ細胞を用いた今後の医療の可能性」という題目でご講演いただきました。

武地先生のご講演では簡単な略歴紹介が行われた後に、まず本題の講演とは別に「医学研究科及び医学部芝蘭会の現況」と題して京大医学部記念講堂並びに歴史資料館の建設改修工事の寄附金を募っていることが報告されました。

続いて認知症についての講演が始まり、先生は昨今の認知症に関する研究、そしてこれから社会全体が認知症とどう関わっていくかについてお話しされました。

研究の分野では、この約25年変えられることのなかった従来の診断基準を見直そうとする動きがあるそうです。例えばバイオメーカーを用いた新しい検査法が従来の検査法に比べ特に研究の現場では推奨されているとのことで、実際バイオメーカーにより臨床の現場でも従来のＭＲＩでは区別の難しかったアルツハイマーと正常圧水頭症との区別が明らかになるそうです。また薬品の研究については一時期マウスでの治療が成功し、注目を浴びたワクチン治療を含むさまざまな戦略があるそうですが、まだ成功の目処はたたないようです。ただそんな中、従来のアリセプト以外にも日本ではコリンエステラーゼ阻害薬三種とＮＭＤＡ受容体一種が現在では使われるようになり、薬品の切り替えを上手く行うことで精神症状が大きく改善され以前に比べ患者とのコミュニケーションが非常に取りやすくなっているという成功事例も報告されています。

神戸支部学術講演会の参加者ら

これから社会全体が認知症とどう関わっていくかについては、武地先生ご自身も京都で、「京都式認知症ケアのつどい」を開き、２３８項目のコンセンサスを得たそうです。その中でも特に認知症患者の医療へのアクセスが遅れ何か問題が起こってからしか治療を受けることができない入口問題について、ケアを受ける側と提供する側双方の要因が多く指摘されました。ケア確立への道筋としては基本的な理念や考え方が必要、すなわち精神症状は解決可能であることや患者と周りの人間との関係性の修復が大事であること、地域作りという視点で社会全体が問題の解決に取り組まねばならないことなどが纏められたそうです。

また去年の九月より始まった入口問題解決などを役割とした認知症カフェ、通称オレンジカフェが疾病感を変えるのに大きな助けとなるのではと紹介をされ、講演は締めくくられました。

中畑先生の講演では、ｉＰＳ細胞研究の現状とこれからについて大変興味深いお話がなされました。ｉＰＳ細胞は線維芽細胞に転写因子を四つ加えるだけで発生し、ほぼ無限に増殖、全ての細胞へと分化できるという特徴をもっています。実際ｉＰＳ細胞で何ができるかということについては患者や正常人から作ったｉＰＳ細胞により病気モデルや治療の研究、再生医療などの可能性が大きく広がるそうです。再生医療に関しては眼疾患などが特に臨床試験も近いそうです。大きな問題として安全面での問題が挙げられますが、導入法の改良が次々と行われており、ｉＰＳ細胞の質の改善などが進んでいるそうです。また、患者本人からｉＰＳ細胞を作る場合倫理的問題や拒絶反応がない反面、お金と時間がかかってしまうことが問題でしたが、現在京大病院では細胞の血液型であるＨＬＡ型のホモドナーを見つけることでｉＰＳ細胞のストックを作る計画が進められており、日赤などとの連携が望まれるとのことです。

再生医療では、疾患特異的ｉＰＳ細胞を用いた難病研究が進んでおり、実際、患者の血液とほぼ変わらない血液を生み出すことにも成功しているそうで、特に小児科などでの研究が期待されているようです。ＣｉＲＡの今後10年の達成目標として基盤技術の確立と知財確保、ｉＰＳ細胞ストックの構築などを掲げ、講演は締めくくられました。

その後、場所を移して午後６時より総会並びに懇親会が行われました。会には約60人という非常にたくさんの方々が参加されました。進行役の林先生の司会のもと、吉田支部長のご挨拶が行われ総会が始まり、その後、物故会員への捧黙祷、学術講演会にお招きした先生方のご挨拶と会はつつがなく進行していきました。会計報告を終えて総会が締めくくられた後、懇親会が同会場で行われました。懇親会では川口先生による乾杯の挨拶が行われ、テーブルを囲んでの会話を弾ませながら神戸支部の各病院の近況報告や福引が行われ、終始笑い声の絶えない非常に賑やかな会でした。私たち雑誌部員も大先輩の方々と一緒に昔の京都大学のお話や今の医学科の近況、医療の現場の話など、たくさんの話題に花を咲かせ大変楽しい時を過ごさせていただきました。

最後に今回このような貴重な会に加えてくださった神戸支部の皆さまに厚く感謝の意を示し神戸支部学術講演会並びに総会、懇親会の報告とさせていただきます。

（文責：２回生　坂本慧）

【ご注意】

最近、芝蘭会員の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報（住所、電話番号等）を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございませんので、くれぐれもご注意くださいますようお願いいたします。

なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合せはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。

芝蘭会 事務局　ＴＥＬ：０７５-７５１-２７１３
ＦＡＸ：０７５-７５２-４０１５

70回・2012（平成24）年版
芝蘭会会員名簿 刊行！

名簿作成にご協力いただき、ありがとうございました。

この度、平成24年12月に芝蘭会会員名簿を刊行いたしました。名簿作成にあたり、会員の皆様から快く異動情報等をお寄せいただき感謝申し上げます。会員名簿をご希望の方は、芝蘭会事務局（075-751-2713）までお問い合わせ下さい。

会員名簿：A4判、890頁
会員頒布代：一部5,250円（消費税を含む）
（但し、会費納入者に限る。その他は10,500円）
送　　料：700円

支部だより

「ボケ防止」講演、ユーモアも

懇親会後、勢ぞろいした北海道支部の参加者ら

今回の講演会では、Enrich Environmentにおける脳神経の再生・シナプスの増加などの基礎的な話から、実際に痴ほう症の防止への応用について、時にユーモアを加えながらご講演いただきました。

続いて、京都大学薬学研究科・薬学部長の佐治英郎先生より「新しい臨床診断、医薬品開発の道を拓く生体分子イメージング」という演題でご講演いただきました。初めに京都大学薬学研究科の現状、特に薬学部の6年制移行後の様子について簡単に紹介された後、先生のご専門である分子イメージング、特に核医学を例に基礎的な部分から、先生ご自身の研究話、そして今後の医療および創薬への応用についてお話しいただきました。

最後に、京都大学医学研究科・医学部長である湊長博先生より「免疫老化と自己免疫病」という演題でご講演いただきました。初めに昨年ノーベル医学生理学賞の受賞で話題となったiPS細胞研究所や医学部附属病院の増築、京大医学部記念講堂・歴史資料館について紹介された後、先生のライフワークである免疫学について、学問的な基礎の部分から免疫系の老化および自己免疫疾患との関連についてサイエンスの視点からお話しいただきました。免疫学はその複雑さから話についていけなくなることがありますが、今回は大変わかりやすくご講演いただき、一般の参加者の方にも好評でした。

その後、場所を京王プラザホテル札幌に移して、引き続き懇親会が開かれました。端和夫先生の乾杯の後、終始和やかな雰囲気で会は進み、特に毎会恒例の会員一人ずつの自己紹介では京大在籍時代の思い出話などで大いに盛り上がりました。宴もたけなわのところで会はお開きとなり、その後は有志ですすきの町へ繰り出して二、三次会を行うなど、大盛況のうちに終了しました。

最後になりましたが、本総会を開催するに当たりご協力くださいました芝蘭会事務局に厚くお礼申し上げます。

（文責：北海道大学アイソトープ総合センター　志水陽一）

【北海道】　平成25年2月23日(土)に芝蘭会北海道支部・近衛通町内会記念総会が開かれました。北海道支部では京都大学医学部・医学研究科卒業生に加え、薬学、理学、工学など、主に生命科学分野の学部・学科の出身者で構成された同門会（近衛通町内会）を設立・運営しており、年に一度のペースで集まる機会を設け、会員間の親睦を深めております。このたびは支部設立30周年を記念し、京都大学より先生方をお招きして総会を開催致しました。

まず、北海道大学医学部学友会館「フラテ」にて講演会を開催いたしました。異なる分野の第一人者を京都よりお迎えするまたとない機会であったことから、「最先端医薬研究セミナー」という題名で会員以外の方にも一般公開し、40名ほどが参加されました。

開会の辞として本総会を企画された玉木長良先生（北海道大学医学研究科・医学部長、昭和53年卒）より総会・講演会の趣旨についてご説明された後、芝蘭会北海道支部長で、北海道支部の立ち上げにご尽力された端和夫先生（札幌医科大学名誉教授・太平洋脳神経外科コンサルティング代表、昭和35年卒）より「ボケ防止の神経科学」という演題でご講演いただきました。端先生は脳神経外科の専門で、全国に先駆けて脳ドックにより診療を開始されたことで著名です。

芝蘭会費納入は自動振替で

平成17年度より芝蘭会費の納入方法として、「銀行口座等からの自動引落し」を採用させていただいております。会費納入のお手間が大幅に省かれ、また、会費の二重払いの防止にも繋がります。ぜひ、ご利用いただきたくお願い申しあげます。

手続き等については、
芝蘭会事務局
（TEL 075-751-2713）
までお問い合わせください。

人事異動

発令年月日	氏名		異動内容
H24.11.16	岩江　荘介	採用	医薬基盤研究所特任研究員より 医の倫理委員会事務局特定講師へ
H24.12.1	田中　司朗	採用	探索医療センター探索医療検証部特定助教より 社会健康医学系専攻健康解析学薬剤疫学特定講師へ
H24.12.1	松村　謙臣	昇任	産科婦人科助教より 周産母子診療部講師へ
H24.12.31	野村　尚史	辞職	皮膚生命科学皮膚科講師より 武田総合病院へ
H24.12.31	万代　昌紀	辞職	産科婦人科講師より 近畿大学教授へ
H25.1.1	石井加代子	採用	健康長寿社会の総合医療開発ユニット研究員より 同特定准教授へ
H25.1.1	松橋　眞生	採用	健康長寿社会の総合医療開発ユニット研究員より 同特定准教授へ
H25.1.1	木村　　祐	採用	学際融合教育研究推進センター特定助教より 健康長寿社会の総合医療開発ユニット特定准教授へ
H25.1.1	木下　武彦	採用	数理解析研究所研究員より 健康長寿社会の総合医療開発ユニット特定講師へ
H25.1.1	大日　輝記	採用	コロンビア大学アソシエイトリサーチサイエンティストより 皮膚生命科学皮膚科学講師へ
H25.1.1	近藤　誉之	採用	康生会武田病院より 地域ネットワーク医療部准教授へ

発令年月日	氏名		異動内容
H25.1.1	笹沼　博之	昇任	遺伝医学放射線遺伝学助教より 同准教授へ
H25.1.31	三浦　　岳	辞任	生体構造医学形態形成機構学准教授より 九州大学教授へ
H25.1.31	石崎　敏理	辞任	高次脳科学神経・細胞薬理学准教授より 大分大学教授へ
H25.1.31	北条　雅人	辞任	脳神経外科学講師より 滋賀県立成人病センター脳神経外科部長へ
H25.2.1	南方　謙二	昇任	心臓血管外科助教より 同講師へ
H25.2.1	吉田　和道	昇任	脳神経外科助教より 同講師へ
H25.3.1	武内　章英	昇任	生体構造医学形態形成機構学助教より 同准教授へ
H25.3.1	馬場　　長	昇任	産科婦人科助教より 同講師へ
H25.3.1	松田　和郎	採用	滋賀医科大学講師より 健康長寿社会の総合医療開発ユニット特定講師へ
H25.3.1	大江　賢治	採用	名古屋大学特任助教より 健康長寿社会の総合医療開発ユニット特定講師へ

会員訃報　（敬称略）　謹んでご冥福をお祈りいたします。

大礒　敏雄	（昭和10年卒）	平成20年2月26日	ご逝去
徳田　信夫	（昭和15年卒）	平成24年11月3日	ご逝去
西脇　郁三	（昭和15年卒）	平成25年1月25日	ご逝去
王　　保粋	（昭和19年卒）	平成24年10月11日	ご逝去
原口　泰彦	（昭和19年卒）	平成25年3月5日	ご逝去
前川　暢夫	（昭和19年卒）	平成24年	ご逝去
渡邉　　裕	（昭和19年卒）	平成25年1月17日	ご逝去
大津　　章	（昭和20年卒）	平成23年8月	ご逝去
河野　　彰	（昭和20年専卒）	平成24年10月14日	ご逝去
岡部　友泰	（昭和21年卒）	平成24年10月23日	ご逝去
江龍　　昂	（昭和23年卒）	平成25年1月21日	ご逝去
笹岡　忠郎	（昭和23年卒）	平成24年4月28日	ご逝去
野村　　博	（昭和23年卒）	平成23年11月29日	ご逝去
紺田　　進	（昭和24年卒）	平成25年1月18日	ご逝去
山口　正司	（昭和24年卒）	平成24年12月2日	ご逝去
小川　正尚	（昭和24年専卒）	平成24年8月21日	ご逝去
中島　幸治	（昭和25年卒）	平成24年11月22日	ご逝去
小畑　耕造	（昭和25年専卒）	平成25年1月1日	ご逝去
木村　　定	（昭和26年卒）	平成23年10月17日	ご逝去
中田　　公	（昭和26年薬卒）	平成24年11月2日	ご逝去
星野　　孝	（昭和27年卒）	平成24年12月28日	ご逝去
高尾　楢雄	（昭和27年薬卒）	平成25年1月14日	ご逝去
近江　　達	（昭和28年卒）	平成25年1月11日	ご逝去
廣谷　速人	（昭和28年卒）	平成25年2月10日	ご逝去
藤繩　　昭	（昭和28年卒）	平成25年1月19日	ご逝去
高村　恭治	（昭和28年薬新卒）	平成24年10月26日	ご逝去
天野　武彦	（昭和29年卒）	平成24年12月25日	ご逝去
小林真佐夫	（昭和29年卒）	平成25年1月31日	ご逝去
中村　博行	（昭和36年卒）	平成24年8月30日	ご逝去
山敷　祐亮	（昭和36年卒）	平成24年11月28日	ご逝去
小川　弘道	（昭和37年卒）	平成24年12月18日	ご逝去
山邉　博彦	（昭和37年卒）	平成25年2月8日	ご逝去
多田　英三	（昭和45年卒）	平成22年1月	ご逝去
福田　善弘	（昭和45年卒）	平成24年7月29日	ご逝去
竹内　吉喜	（昭和55年卒）	平成24年7月24日	ご逝去
山本　裕司	（平成16年卒）	平成18年10月28日	ご逝去
安藤　孝夫	（教室会員 解剖2）	平成24年10月14日	ご逝去
武田　清子	（教室会員 病理学）	平成24年10月18日	ご逝去
砂川　真治	（教室会員 法医学）	平成24年12月7日	ご逝去
武田美代子	（教室会員 内科2）	平成24年9月16日	ご逝去
村田　夏彦	（教室会員 産婦人科）	平成24年11月25日	ご逝去
中谷　克己	（教室会員 耳鼻科）	平成24年9月6日	ご逝去
水野　朝見	（教室会員 整外）	平成23年7月10日	ご逝去

芝蘭会報編集委員会
委員長　中尾一和
委　員　斎藤信雄、岩田征良、豊國伸哉、山田圭介、園部　誠、阿部　恵
芝蘭会雑誌部
顧　問　中尾一和
部　員　勝島將夫（6回生）
橋本健太郎、中村有輝、山田直生、畑野翔太郎、前田峻宏、宗宮伸弥、柳井谷駿史（以上5回生）
真辺　諄、森山太陽、鶴田将史（以上3回生）
赤埴未宝、宮崎規晶、坂本　慧、大植啓史（以上2回生）
高屋龍生、西川裕太（以上1回生）
芝蘭会事務局
事務局長　山田　均
総務課長　秋山和美
管理課長　松本　悼

原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であります。支部活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会で決めさせていただきます。

芝蘭会報 編集委員会

●事務局から●

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますのでご了承ください。
（FAX 075-752-4015）